

## 藍あいと石灰

株式会社 バルクワールド 川 添 洋

博物館に展示してある弥生時代のコーナーに行けば稲作に励む人形が大概置いてあり、その人形が着ている衣は無地が圧倒的なので、当時の衣は白だったと思いがちですが、例えば、吉野ヶ里遺跡では絹／麻布に日本あかね茜や貝紫で染色された布が出土しています。又、奈良県下池山遺跡では藍



スクモ染に依る藍染

### 『藍の館』

で染めた布が見つかっています。では、まだ絹や木綿を知らない時代の日本列島はと云えば、カラムシ苧麻・くず葛・こうぞ楮等から繊維を得ていて、『麻はインド・中国・日本でも4-5千年前から植物染料によって自由に染められていた。』と村上道太郎氏は『藍が来た道』に書いていますから、布と着色、及び、着色を助ける媒染剤は相互に関連して発達した歴史があったに違いありません。

ところで、“Japan Blue”と呼ばれる藍染めですが、ホームページ『藍の歴史と文化』に依れば、紀元前3千年頃のインダス文明の地で藍染の染織槽跡が見つかっていて、古くから藍染めがあった事が判っています。しかし、日本列島の藍については、“越人”を起源に持つ弥生時代の倭人が稲作や養蚕と共にタデ藍を日本列島に持ってきたのがその始まりと村上氏は同本の中で想定しています。そして、日本にはタデ藍の他に、北海道のエゾタイセイ、沖縄にリュウキュウ藍の3種類があったと村上氏は書いていますが、その藍染めは19世紀以降のジーンズに代表される化学染料の登場に依って衰退していったのは衆知の事実です。

さて、日本で藍染めと云えば阿波藍が有名です。徳島県藍住町の『藍の館』を訪ねるとスクモ染で繁栄して来た江戸時代の阿波藍の仔細を知る事ができます。スクモ染とは収穫したタデ藍を刻んで乾燥させた葉藍を3ヶ月程発酵させてスクモにしておき、そして、染色の際にはそのスクモを熱湯で練り、クスノキ等のアルカリ度の高い灰汁に石灰・酒等を加えて朝夕にかき

混ぜ30度程の温度に保ちながら“藍だて”して布を染める方法を言うのですが、このように藍染めには石灰が使われています。藍染を行う地域に依っては灰汁だけを使う所もあるようですが、水には溶けにくい藍でもアルカリには溶けるので、石灰はペーハーをより上げる働き（アルカリ化）及び消毒として用いました。

この阿波藍のスクモ染に対し沖縄には琉球藍の泥藍いのほがあり、伊野波盛正氏が国選定保存技術者としてその技術を伝承しています。澤地久枝氏の『琉球布紀行』には現地を訪ねた際の有り様が書かれてあり、『石灰水をつくる槽では消石灰の袋が開かれ、その石灰水が藍の溶液に投入されると、まるで沸騰するようなダイナミックな水の動きと、大きな音がたつた。…攪拌されて・泡は白から青い色に変る。…貯水槽へ移された溶液は空気にふれて酸化し、いつしか美しい藍色に近くなっていた。この液を沈殿させ、上澄液をすっかり捨てたものが藍の原料の「泥藍」となるのだ。』とあって、続けて、大井川上流の山間盆地にある藍工場については、強い太陽光線を好まず「半かげ」を好む藍には最適の地だが、歩いていく以外にない山道を額にひもかけた「しょいこ」で石灰や肥料を運んだり、仕上がった泥藍を背負って運ぶのは大変な作業と記しています。このように琉球藍の場合、泥藍をもって布を染めるのがその特徴です。

さて、その藍工場は国頭郡本部町伊豆味くにがみ もとぶ いずみにあります。本部町には琉球セメントさんを始め石灰会社があります。従って、澤地氏の本を読めば、琉球藍は植物のリュウキュウ藍だけでなく、本部の石灰が相まって琉球藍が生まれ育はぐくまれた事が推し量れます。そして、阿波藍も徳島藩の庇護の元で発展したのですから当然地元の石灰を使ったはずで、とすれば、阿波藍の興隆も阿南市近辺の石灰と密接に繋がっているはずで

訂正並びにお詫び；前回の『コンニャクと石灰』中、縄文時代にコンニャクを粉にして保存したと書きましたが、粉保存技術は江戸時代に開発された技法でした。ここにその間違いを訂正しお詫びします。

川添